

吉井勇全集

第四卷

番町書房

吉井勇全集 第四卷 歌物語

昭和三十八年十一月二十日発行

定價一、六〇〇圓

著 者 吉 井 勇

發行者 東京都千代田區二番町二
大 島 秀 一

發行所 東京都千代田區二番町二
番 町 書 房

電話東京 (三三三) 六六五八
振替 東京 一五八四四
印刷 大日本印刷株式會社
製本 株式會社 昇 榮 社

落丁・亂丁本はお取替えいたしません。

© 1963 T. YOSHII printed in Japan

吉井勇全集記念品引換券

第 1 卷
歌 物 語
(8-2)

全 8 卷御購入の方に限り有効。
1 卷から 8 卷までの引換券を切りとり、完結次第
御購入の書店へお渡し下さい。
引換に記念品を贈呈いたします。

2

番 町 書 房

責任編集 解説 木俣 修

吉井勇全集 第四卷 歌物語 目次

水 莊 記

水 莊 記

苦 痛 の 谷

山 上 哀 話

海 郷 異 志

七 尺 牘

戲 曲「無 智」の 序

湘 南 秘 事

恋 愛 小 品

恋 愛 小 品

新 浴 泉 記

鬱 憂 録

明 眸 行

明 眸 行

女 優 伝

二六 二〇一

二四 二六 二〇

二〇 二五 二六 二七 二八 二九

厭世記

三六

恋愛異聞

三七

亜刺比亚人形

三七

恋愛異聞

指輪草

三六

自叙歌
草珊瑚

一 鎌倉の夏 二六 二 獅子窟 二六 三 沈丁花 二六 四 葦

の葉 二七 五 片恋 二九 六 祇園の風流 二九 七 紅燈行

三〇 八 湯河原の冬 三〇 九 酒徒 三〇 一〇 狂馬楽 三三

一一 屋根の草 三七 一二 遁世 三三 一三 二つの心 三六

一四 わくらば 三九 一五 筑紫瀉 三三 一六 秘戯 三五

一七 芝居小景 三五

自叙歌
恋ぐさ

月あかり 三四 蛇の恋 三五 水屑 三六 ひと夜 三七

仏画 三八 浪華妻 三〇 浄瑠璃舟 三二 さすらひ 三三

鳳山の死 三三 宗達の幅 三四 短夜亭 三五 円山月夜 三五

わが旅 三三〇 霧の朝 三二八 山霧 三二九 山のあなた 三六〇
 山の精 三六〇 山鶯 三六一 黒姫おろし 三六二 煩惱 三六三
 紅葉遺箋 三六三 京の秋江 三六四 散歩 三六六 曼陀羅雲 三六七
 伴天連の宿 三六六 黒姫山 三六九 寂寥 三七〇 うつそみ 三七二
 狩場明神 三七三 初旅 三七三 恋の闇 三七四 小木通ひ 三七五
 野分 三七六 水のおもて 三七六

生ひ立ちの記

生ひ立ちの記 三八〇
 骨牌の思ひ出 四二七
 はげあたま 四三四

いさな船 四三三

酔狂録 四三七

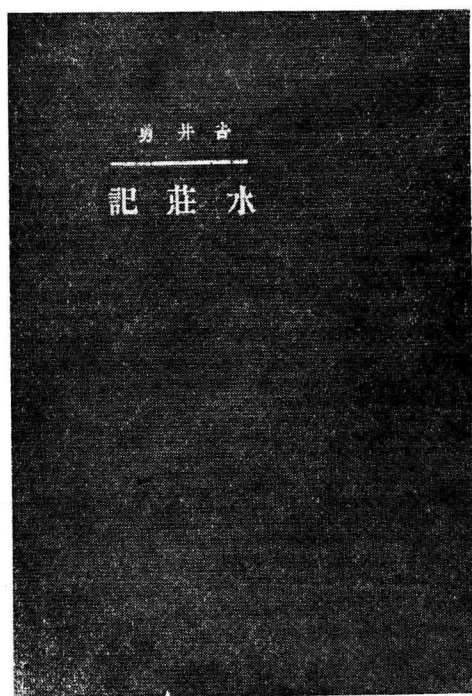
緑の窓帷 四四六

髑髏の絵 四五六

現代名歌選 四六一

解説 木俣修……五九

水 莊 記



大正元年10月発行『水莊記』
表紙・装幀 斎藤与里

水 莊 記

水 莊 前 記

一

読者よ。私はこの一篇の哀史を物語るまへに、この水莊の建てられてゐた所と、この出来事の起つた時と、この物語の中に現はれて来る人々とは、すべて何処とも何時とも誰ともわからぬ事にして置きたいと思ふ。さうして読者の想像の翼の羽搏はたくに任せたまふなら、かへつてこの物語を美しくする事が出来るであらう。

読者よ。(二度かく呼ぶを許したまへ。)かくてわが物語のつたなきを咎めたまふな。

わかき日の悲しかりける物語誰が子に獻すべきか
まどひぬ

かへりみればすでに三年の昔なり夢幻のなかに住
みしは
かにかくにうき世の波の悲しさよかくかこつ子と
なりにけらずや

私が最初水莊を訪れたのは、早春三月、野には草薺くさあざなが微かに萌もえるとともに、わかうどの心にもやはらかきもの惱なやみが忍び入る頃であつた。

伊太利亞イタリヤの年若き領事が、かりそめの恋の隠れ家として建てた水莊は、その人が故郷へ帰つた日から一年の間住む者もなく過ぎて来た。

夜毎に岸を打つ河波は、あまりに暗き寂しさに、幾度かかう云ふ言葉を繰り返したであらう。

「水莊の窓に灯を見ぬ悲しさよ。」

三月の野を彩れるうすみどり敷きて寝ねれば夢圓
かなる

惱ましきわがわかうどの眼差まなざしよこころ弱よきをさ
な愁ひそ

南歐のみやびをが接吻きずのひびきをばなほ聴くごと
き水莊の窓

河はいま仄かに暮れぬ春の夜のうす紫の闇のかな
しさ

私がこの水莊の人となつてからは、日毎に窓から笑ひ声が洩れるやうになつた。さうして夜毎に窓から明るい灯影が水に映るやうになつた。夕日の光華やかに水莊の緑の壁を照らす時、かの南歐のわかうどが恋人

の爲めに数奇を尽した部屋の中で、私はかならず数人の女と笑ひ興じてゐたのである。

「水莊へ。」

或る女学寮の校庭の片隅に集まつた四五人の女は、日毎にこの言葉を繰り返してゐた。

笑ひごゑ艶めかしくも窓を洩る月夜となれば嫉まれやせむ

新しき五人女のなかにして男ひとりの怨まるること

よく笑ひよく戯るる少女らがあからさまなる戀競べかな

わが媛友はすべて美しかつたが、その中にも秀でた一人の女があつた。或る侍従武官の娘で、髪黒く顔は時々青ざめて見えるほど白かつた。いつも眩しげに眼瞬きしながら、早口に物を云ふその癖を、私がうれしきものの一つに数へるやうになつたのは何時頃からであつたらう。

黒髪のもつとも長きひとや誰れ情もつとも深き子や誰れ

眼瞬きはこの蠟燭の灯のごとし風に當てじと君をいだしぬ

わが胸にまた喜びを増さしめし君よと云ひて吸ひにけるかな

かくて私とこの侍従武官の娘との間に、幸ある眼くばせが交されるやうになつた時分には、水莊は何時の間にか他の媛友を迎へる日が稀になつてゐた。

併し私達はかへつてその寂しさを喜んで、唯二人大河に向つた部屋の中で、静かに暮れてゆく水の色を眺めながら、夢のやうな物語に身も魂も融かしてゐた。

さうしてその物語の終る頃には、いつも睡蓮のやうに微かな音を立てて唇の花が開いたのである。

君がため遊ばずなりし少女らがなに惜しからむ君を惜しめば

ただ二人ある時をのみ喜びぬいにしへよりの戀のならひに

うつくしき物語より咲き初めぬわかうどの花たをやめの花

初夏になつてからの事である。この河に架橋演習に來た工兵の一隊があつた。その中に交つてゐた美しき中尉は幾日かの間をこの水莊で過ごした。貴族出で華美ずきの好丈夫だつたが、或る時ふとこの女を垣間見て、どんなに心を燃やしたであらう。

或る夜晚餐後の会話の中に冗談らしく笑ひながら云つた。

「僕はあの女に惚れつちまつたよ。」

わが猛者は拍車を鳴らし劍執れどかなしき戀を語るやさしさ

工兵の天幕しろき夏の陣窓より君と指さしかたる透見するうしろ姿のをかしさよ中尉と肩を打てばわらひぬ

私がこの事を女に告げた時、女は唯微笑しただけであつた。さうしてその中尉の名を聞いた時、殆んど椅子から転がり落ちさうに笑つて云つた。

「それは私のお友達と許嫁になつてゐる方ですわ。」

こんな可憐な小さな事件も、その時の私には少なからぬ懊惱を与へた。演習が終つてこの工兵中尉が水莊を去る時、温かき握手をしながら、如何してもこの人の健康を祈ることが出来なかつた。

わが君を戀ふとし聽けば敵なり胸安からず思ひ初めにし

戀びとはかりそめごとも一大事起れるごとく胸騒ぎする

つはものが靴音あらく水莊を去る時君にうれしと

云ひぬ

歡会は次第に濃やかになつた。日毎夜毎に二人の間には、いつも同じ言葉と同じ事とが繰り返された。二人は始めて生命と云ふものを知るやうになつた。さうして水莊に、

「生命の家。」

と云ふ名を付けて喜んだ。

あはれなる恋人よ。生があれば死があると云ふことを知らないのか。

つかれしや眠げに見ゆる君が眼よさらばわが手に枕したまへ

ああわれら生命の家に住みながら生命みじかきことを願ひぬ

歡會や初夏の夜の宵やみに接吻いと長き子となりにけり

戯れぬ生命死ぬ日を知らぬごと戀の破るる日を知らぬごと

二

全くこの水莊は、戀慕のひとに取つて、この上もなく幸福な場所であつた。都から三里も離れたこの大河

のほとり、極の芽青く萌ゆる密林の中に、緑の壁うつくしき館やふたが隠れてゐるとは、駅路を急ぐ人は誰か思はう。二人は日毎に野や森を追逼して、私達の痴態に目をそば立てる村民の姿を見ると、まるで獣のやうに怖れながら、この密林の中に遁げ込んだ。

窓はみなまばゆきばかり輝けりこの水莊にさいはひや住む

わが林一步出づればいとさむき風吹くときき長く出でざり

野路を往き森の徑ごみちを歩めども君をうばひに来るひともなし

獸かとわれみづからをうたがひぬあまりに森のなかを好めば

水莊は屋も夜もともに短かつた。二人は黄昏の早く来るのを悲しみながら、また黎明の早く来るのを悲しんだ。さうして堅く閉した部屋の中で、まるで豹のやうに戯れながら、かかる時の長いことを願つたのである。

君のもたらして来た紅くれないの酒は、どんなに私達の興を助けたであらう。

戀人の時はあまりにはやく過ぐ晝もみじかし夜も

みじかし

たはむれぬいのち短し歡樂はながしと胸のうちに叫びて

わが君よまたたそがれは来りぬとあはれ幾度われは歎きし

床に敷き詰めた青い色の絨氈も、或る時は二人には春の野のやうに思はれた。かくて私達は夢見ごちにその華紋の上を踏んで、相並びながら窓の方に近寄つた。さうして折柄卓の上に置かれた籠の中で、鸚鵡がその名を呼ぶのを聴いて、

「まあ、厭な鸚鵡だこと。」

と女は私の顔を見て微笑しながら云つた。

草嫩くさわかひ縁の氈も萌えにけり君なよびかに歩みたまへば

たのしげに二人かたりぬ窓のもといとあたたかき日光のもと

鸚鵡さへわがたをやめを慕ふらむ日ごと夜ごとに君が名を呼ぶ

併し、その微笑は直ぐにその面から消えた。鸚鵡が次に云つたことは、世にも怖いことであつた。この不思議な鳥は、電いんちきに打たれたやうに胸を顫はせて、

咽喉が裂けるかと思はれる程苦しげな声で叫んだ。



画里与藤斎

「人殺し。」

鳥はこの言葉を三度繰り返した。さうしてその尖つた嘴を翼の間に入れて、悶ゆるが如くその肉を啄^{ししち}んだ。怖ろしき鳥のさけびよそを聴けば戀さへ覺むるこちするかな

窓を射る日光さへもおのかす聲もわが世にありと思ふや
尖りたるその嘴を顫はせて鸚鵡はおのが靈魂^{たましひ}を食む

女は恐怖の表情を以て私の方を見た。その目はこの鳥の絶叫に対する驚愕に満たされてゐた。併し、私は

今鳥の云つた言葉は、昨日この部屋の中で、この女の口から聴いた言葉であると云ふことに思ひ当つた時、覺えず笑ひ崩れずにはゐられなかつた。

女よ、何も驚くことはない。鸚鵡はあなたの真似をしたのだから。

ああ昨日ありとあらゆるたはむれにすべてその身を投げし君はも

情いと濃やかなればひとしほにもの惱ましく二人あるらむ

思ひ出づ黄金^{がね}のごときまぼろしをそのまぼろしのなかの女を

女も昨日の烈しい戯れを思ひ出して恥づるが如く笑つた。さうしていつもとは変つた調子で私に云つた。「憎らしい鳥だわね。私達の云つたことを聴いてゐるなんて。」

この日から鸚鵡の籠は、厨の傍の薄暗い棚の上に置かれた。時々私とその籠を覗くと、この不思議な鳥は鞠のやうに身を縮めて、悲しげに羽を顫はせながら、危ふく止り木の上に縋つてゐた。

唇はいまなほ痛しただむきもいまなほ痛し春のたはむれ

河風はまた黒髪をなぶらむといとも仄かに吹きて
來にけむ

鳥は云ふ翼顫ふを君見ずやわがかなしみを君は知
らずや

この出来事があつてから、何故だか私達の胸は次第
に冷え始めた。恋の秘密をあつた鳥に窺はれたと云ふこ
とが、女にはこの上もない悲しみであつた。それから
と云ふものは常に狂はしきことの目を口走つて、私が
肩に懸けようとする手さへも拒んだ。男の心を蕩らす
ことばかりを考へてゐた女が、如何してこんなに變つ
たのであらう。

戀覺めの時近づくとき君は云ふあらず死なりとわれ
もまた云ふ

わが君のものの狂ひこそ悲しけれ窓に凭りては口笛
を吹く

唇をこばみ腕もまたこばむ君が心は冷えにけらし
な

或る朝私が眼覺めた時には、女の姿はもう水莊の中
には見られなかつた。女は黙つて私の館から忍び出し
て、遂に都のその家に帰つて往つた。歛會一月、これ
を夢と云はなければ、何を夢と云つたら好いのであら

う。

私はその日一日密林の中を逍遙した。あの何処から
ともなく吹いて來て、何処へともなく吹いて往く風の
やうに。

君去りぬはかなきものの常なれば夢のやうなる聲
音にして

一月のあひだ續きしわが夢も破れにけりな春過ぎ
しより

林より林へゆきぬ一日をかくて過ぎば愁消ゆべ
き

寂寞は重く私の心を圧した。さうして一月の後には、
私は到頭水莊を見棄てて去らなければならなかつた。

私は夢の名残りを水莊の窓に惜しんで、見返りがちに
野路を急いだ。いづれまた汝の胸に歸つて来る身とは
知りながらも、その緑の壁が密林のあなたに消えた時
には、覚えす、

「さらば。」

と叫んで泣いた。

寂しさはまたわが胸にかへり來ぬあるべき君のな
きを思へば

水莊に別る時となりにけり生命の家よさらばさ

らばと

野に出でぬふりさけ見れば水莊も君を思ひてうなだれて立つ

荒廢した屋根裏の子は、日も夜も思ひ出にのみ耽つてゐた。何処の露肆はしみせから購つて來たのであらう。蘇枋色の古布は厚く窓を蔽うて、私はいつも幻のなかに住んでゐるやうに思はれた。かくて私はこの陋巷に哀れな時を送るやうになつてから、何時しか一年は過ぎてしまつた。

屋根裏やおもひでにのみ生くる子がこのごろいたく瘦せにけること

あはれにもいと痛ましきまぼろしをみづからつくり樂むや誰れ

君いかによき日を送りおはすともまた水莊を忘れたまふな

蘇枋色の夢を夜な夜な見るもよしかならずなかに君あるもよし

水 莊 記

一

私が二度水莊に移つて來たのは、冬の始めのことであつた。一年の間に水莊の姿もいたましき程に變り果てて、大河に臨んだ私の部屋の裝飾なども、大分は何者かに盜まれてしまつた。雨漏の汚染しみがあさましく残つてゐる壁の前には、花瓶も狼藉のために碎かれて、薔薇が枯れたまま床の上に落ちてゐた。

私は深い絶望を感じながら、長い間この部屋の中を見廻してゐた。

枯薔薇一年まへのよろこびもかく枯れ果てぬかなしきかなや

花瓶は落ちて碎けぬわが戀のかけらもなかにまじりたるべし

神無月下浣すあのひと日よかなしみの館にかへる時にふさへる

わたましの車を引ける水漬みづじの爺にもかかるかなしみありや

私は思はず悲しげに呟いた。

「如何してこんなに變つたのだらう。」

さうして徐かに窓の傍へ歩み寄つた時、私の心は二度絶望を感じずにはゐられなかつた。あの密林はいたましくも荒れ果てて、河の面に映る樹の影も寂しく水に動いてゐるばかりである。巢を壊たれた鳥のやうな心持で、私は水莊の中を歩き廻つた。さうして厨の傍に來た時、私はまたここにも悲しい出来事を見なければならなかつた。

かなしみの色もてすべていろどらるわが水莊もわれの心も

何時の間にかくは變りしわが家ぞ日光さへもかなしげに差す

わが戀の古巢はかくてこぼたれよ君かへり來る時
もあらねば

私の目のはからずも棚の上に注がれた時、あの不思議な鳥の籠が、置き忘れたままになつてゐるのを見て、私は驚愕の目を見張つて思はず立留つた。さうしてあの鸚鵡の不幸な運命を危ぶみながら、怖る怖る籠の中を覗き込んだ。哀れにも鳥は痛ましき死骸となつて、籠の底にその身を横たへてゐた。併し、怪しいことに

はその翼は、生きてゐた時よりも更に美しく私の目に映つた。

戀びとはよそを思はずあはれにも忘れて往きし青き鳥籠

わが君は鳥のごとくに歌ひきとまたおもひでの涙
ながしぬ

いたましき晝の夢かとうたがひぬいとうつくしき
戀のなきがら

「鸚鵡の死。」

それは何ごとか暗示してゐるやうに思はれたので、私は黙つてその死骸を凝視してゐた。併し、それが何でもないと云ふことを知つた時、私はその籠を擁へて徐かに玄關の石段を下つた。さうして夢のやうな日光を身に浴びながら、この鳥のために呼び起された回想に耽つた。

わが君の愛でたまひたる鳥なれば死しても翼うつくしきかな

悲しげに夢のむくろのよこたはる傍に立ちものを
思ひぬ

日光がいとやはらかに降りそそぐなを歩めば夢
覺めずけり

何時か私は大河の岸に立つてゐた。その面は灰色に濁つてゐて、雲の影さへも映らない。水際の泥の上に家鴨の足跡が謎のやうに続いて、遠く白楊の樹蔭の中に消えた。何に驚いてか銀色の魚が水の上を飛ぶと、その微かな響までが何となく人を脅かすやうにすさまじく聴えた。私は黙つて鸚鵡の死骸を見た。さうして私は黙つて大河を見た。

「運命。」

私は心の中でかう叫んだ。

濁りたる水のいろこそ堪へられね河邊に立ちて君をおもへば

水際の白楊の葉のわななきを見てとめどなく涙ながれぬ

冬の日のしろがね色の愁浮く大河を見てかなしめるひと

私が庭園の中に入つて、この鸚鵡のために小さな墓を造つたのは、もう薄暮に近い頃であつた。樹の間から斜めに差して来る夕日の光は、烈しく傾へながら土の上に落ちた。地には朽葉が金の如く散つて、涙のほひが何処からともなく漂つて来た。ああ、この涙のほひをあの侍従武官の娘は、どんなにあの時喜んだ

であらう。

やはらかに樹蔭を洩れし過ぎし日の聲をもとめて
廢園に入る

月ささばその夜のごとく輕らかに落葉を踏みて君
來るらむか

地に落ちてともに悲しくにほひけり君の涙とわれ
の涙と

いまもなほ君の吐息のきこゆるよ樹の間を洩れて
夕日さす時

その夜は暁近くまで私の部屋とまの窓には灯が点つてゐた。私はその蠟燭の光に堪へがたき鬱憂を感じながら、卓子に向つて痛ましき黙想を續けてゐた。あの工兵中尉は如何したであらう。さうしてあの侍従武官の娘は如何したであらう。哀れなる蛾よ。冬の力におののきながらも、何故私の沈思を破りに来るのか。

新しき曉いまだおとづれずわが水莊の窓のそとも

蠟燭の光を君はよろこびぬたそがれ時の夢に似たりと

蛾は云ひぬ窓のうちなるわかうどは夜も寐ずひとり何に悩むや